

寂しさに耐える戦災孤児

あいおいごう
豊橋では愛生郷という施設で孤児たちが

現在、豊橋市には、豊橋市福祉事業会という社会福祉法人がある。豊橋ひかり乳児院から、高齢者向けの「ケアハウスかなだ」まで10施設があり、総合的な福祉センターとして、たいへん充実したものである。

しかし、戦後間もない頃は、愛知県同僚援護会愛生郷と言われる社会福祉施設であった。豊橋ひかり乳児院は、昭和24年、定員9名の乳児預かり所として開所し、また「豊橋若草育成園」は、養護施設「愛生郷育成園」として、昭和26年開所した。当時の入所児は、戦災孤児や浮浪児、親の死亡や長期疾病など、戦争の影響を強く残したケースが大半であった。

このころ、乳児院の職員であった清水ラクエさんは、豊橋市福祉事業会の創立30周年記念誌に寄せた「思い出」の中で、次のように記している。

当時は旧陸軍の兵舎を利用した粗末な建物で、若い乳児たちには、真冬の寒さはとても厳しいものでした。

当時の子どもたちは、まだ環境もよくなかったもので、よく病気にかかり、特にはしか等の時は、何人にも感染し、夜中であっても施設から電話があるとよく駆けつけました。医療との関係も今のようにスムーズではなかったので、翌朝まで、ただ看病するのみということがよくありました。また市民病院に通院するときは、熱のある子どもを背負い、西口線バスを台町で乗り換えて行きましたので、子どももかわいそうで大変つらい思いをしたことを、とてもよく覚えています。さらに、残念ながら命を救うことができず亡くなる子どももおりましたので、その時は観察室にて職員で通夜を過ごし、次の日に院長が火葬場までお送りしていました。

— 本文より抜粋 —



豊橋市福祉事業会 30 年記念誌より



描いた作品
戦災孤児のためにささげた一生を
藤崎康夫 作
くもん出版 発行



長年、子どもたちに愛を注いできた2人の保母さん(矢野さん、波崎さん)が、表彰を受けた

東海日日新聞 昭和47年10月23日

戦災孤児となって

岡崎市^{そぶみ}衣文町にあるそぶみ^{いしんじ}観音涓信寺には、戦後、名古屋市の戦災孤児が収容されていた。現在そこには、下の写真にある記念碑が建てられている。常時、100名ほどの孤児たちが、涓信寺の籠堂の中で生活していた。始めは、男女一緒に寝泊りしていたが、進駐軍に別々にするように指導されたため、現在の記念碑のあるところに、女子寮が建てられたんですよ。」と住職の日比野道英さんは語る。また、現在87歳の磯子さんは、みんないい子たちばかりで、よくうちの子どもたちをかわいがってくれました。当時の卒業生が、ときどきは訪ねてくれることがあります。」と、懐かしそうに言われた。卒業生が、幸せに暮らしていてくれることを、お二人は今でも願っている。



小学生の頃、よくいっしょに遊んだと話す住職の日比野道英氏



住職のお姉さんの磯子さんは、終戦までは、名古屋の疎開児童もいたと語る



「鐘の鳴る丘」にちなんで、鐘が吊り下げられている記念碑

名古屋市立 本宿郊外学園の碑
昭和二十一年二月十日、第二次世界大戦に依る名古屋市を中心とする戦災孤児の養育と学業を行う養護施設本宿郊外学園が、当涓信寺の籠堂に於いて創められました。
その後、南の猿田の丘に寮舎校舎を新築移転し、昭和四十一年尾張旭市へ三学園統合移転し、本宿の地を去りました。この間二十年戦後の混乱期に「強く 明るく 正しく」のモットーのもと、常に百余名の児童が生活し、学業を習い、毎年三十名余の児童が社会へと巣立っていきました。
戦後五十年を経た今、この学園を巣立って幸福な家庭生活を送っております。私たち卒業生は、この一生の思い出の恩ある地に学園の記念碑を建てたのであります。

平成九年八月十五日 卒業生有志一同